

## I am a Cat – Chapter 11b (Natsume Sōseki)

じゅうじ  
「十時になったかい」

お こと  
「惜しい事にならないね。——紺屋橋を渡り切って川添に東へ上って行くと、按摩に三人  
あった。そうして犬がしきりに吠えましたよ先生……」

あき よなが かわばた とおぼえ しばい きみ おちゅうど い かく  
「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちょっと芝居がかりだね。君は落人と云う格だ」

なに  
「何かわるい事でもしたんですか」

「これからしようと云うところさ」

かわいそう か わる おんがくがっこう せいと ざいにん  
「可哀相にヴァイオリンを買うのが悪い事じゃ、音楽学校の生徒はみんな罪人ですよ」

ひと みと  
「人が認めない事をすれば、どんないい事をしてても罪人さ、だから世の中に罪人ほどあてにな  
らないものはない。ヤソもあんな世に生れれば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴァイオリ  
ンを買えば罪人さ」

ま  
「それじゃ負けて罪人としておきましょう。罪人はいいですが十時にならないのには弱りました」

いっぺん まち な かんじょう た ひ  
「もう一返、町の名を勘定するさ。それで足りなければまた秋の日をかんかんさせるさ。そ  
れでもおっつかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ。いつまでも聞くから十時にな  
るまでやりたまえ」

わら  
寒月先生はにやにやと笑った。

せん こ こうさん いっそくと  
「そう先を越されては降参するよりほかはありません。それじゃ一足飛びに十時にしてしま  
いましょう。さて御約束の十時になって金善の前へ来て見ると、夜寒の頃ですから、さすが  
めぬき りょうがえちょう ひととお た むこう げた おと さみ ころも  
目貫の両替町もほとんど人通りが絶えて、向からくる下駄の音さえ淋しい心持ちです。  
金善ではもう大戸をたてて、わずかに潜り戸だけを障子にしています。私は何となく犬に  
つ ころもち はい しょうしょうすきみ  
尾けられたような心持で、障子をあけて這入るのに少々薄気味がわるかったです……」

この時主人はきたならしい本からちよつと眼をはずして、「おいもうヴァイオリンを買ったかい」と聞いた。「これから買うところです」と東風君が答えると「まだ買わないのか、実に永いな」とひとり言のように云ってまた本を読み出した。独仙君は無言のまま、白と黒で碁盤を大半埋めてしまった。

「思い切って飛び込んで、頭巾を被ったままヴァイオリンをくれと云いますと、火鉢の周囲に四五人小僧や若僧がかたまつて話をしていたのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイオリンをくれと二度目に云うと、一番前にいて、私の顔を覗き込むようにしていた小僧がへえと覺束ない返事をして、立ち上がって例の店先に吊るしてあったのを三四挺一度に卸して来ました。いくらかと聞くと五円二十銭だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おもちゃじゃないか」

「みんな同価値かと聞くと、へえ、どれでも変りはございません。みんな丈夫に念を入れて拵らえてございますと云いますから、蝦蟇口のなかから五円札と銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してヴァイオリンを包みました。この間、店のものは話を中止してじつと私の顔を見えています。顔は頭巾でかくしてあるから分る氣遣はないのですけれども何だか気がせいで一刻も早く往来へ出たくて堪りません。ようやくの事風呂敷包を外套の下へ入れて、店を出たら、番頭が声を揃えてありがとうと大きな声を出したのにはひやっとしました。往来へ出てちよつと見廻して見ると、幸誰もいないようですが、一丁ばかり向から二三人して町内中に響けとばかり詩吟をして来ます。こいつは大変だと金善の角を西へ折れて濠端を薬王師道へ出て、はんの木村から庚申山の裾へ出てようやく下宿へ帰りました。下宿へ帰って見たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君が気の毒そうに云うと「やっと上がった。やれやれ長い道中双六だ」と迷亭君はほっと一息ついた。

「これからは聞きどころですよ。今までは単に序幕です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。たいていのものは君に逢っちゃ根氣負けをするね」

「根気はとにかく、ここでやめちゃ 仏 作って 魂 入れずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論随意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴァイオリンは買ってしまいましたよ。ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売るところなんか聞かなくってもいい」

「まだ売るところじゃありません」

「そんならなお聞かなくってもいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞いてくれるのは。少し張合が抜けるがまあ仕方がない、ざっと話してしまおう」

「ざっとでなくともいいから緩くり話したまえ。大変面白い」

「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、まず第一に困ったのは置き所だね。僕の所へは大分人が遊びにくるから滅多な所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露見してしまう。穴を掘って埋めちゃ掘り出すのが面倒だろう」

「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は気楽な事を云う。

「天井はないさ。百姓家だもの」

「そりゃ困ったろう。どこへ入れたい」

「どこへ入れたと思う」

「わからないね。戸袋のなかか」

「いいえ」

「夜具にくるんで戸棚へしまったか」

「いいえ」

東風君と寒月君はヴァイオリンの隠れ家についてかくのごとく問答をしているうちに、主人と迷亭君も何かしきりに話している。

「こりや何と読むのだい」と主人が聞く。

「どれ」

「この二行さ」

「何だって？ [Quid aliud est mulier nisi amicitiae inimica] ……こりや君羅甸語じゃないか」

「羅甸語は分ってるが、何と読むのだい」

「だって君は平生羅甸語が読めると云ってるじゃないか」と迷亭君も危険だと見て取って、ちよつと逃げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりや何だい」

「読める事は読めるが、こりや何だは手ひどいね」

「何でもいからちよつと英語に訳して見ろ」

「見ろは烈しいね。まるで従卒のようだね」

「従卒でもいいから何だ」

「まあ羅甸語などはあとにして、ちよつと寒月君のご高話を拝聴仕ろうじゃないか。今大変なところだよ。いよいよ露見するか、しないか危機一髪と云う安宅の関へかかっているんだ。——ねえ寒月君それからどうしたい」と急に乘気になって、またヴァイオリンの仲間入りをする。主人は情けなくも取り残された。寒月君はこれに勢を得て隠し隠を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る時御祖母さんが餞別にくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持って来たものだそうです」

「そいつは古物だね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」

「ええ、ちと調和せんです」

「天井裏だって調和しないじゃないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心して給え。秋淋しつづらにかくすヴァイオリンはどうだい、両君」

「先生今日は大分俳句が出来ますね」

「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出来てるのさ。僕の俳句における造詣と云ったら、故子規さんも舌を捲いて驚ろいたくらいのものさ」

「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な東風君は真率な質問をかける。

「なにつき合わなくっても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云うので、東風先生あきれて黙ってしまった。寒月君は笑いながらまた進行する。

「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すのに困った。ただ出すだけなら人目を掠めて眺めるくらいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にもならない。弾かなければ役に立たない。弾けば音が出る。出ればすぐ露見する。ちょうど木槿垣を一重隔てて南隣りは沈澱組の頭領が下宿しているんだから剣呑だあね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる。

「なるほど、こりゃ困る。論より証拠音が出るんだから、小督の局も全くこれでしくじったんだからね。これがぬすみ食をすとか、贗札を造るとか云うなら、まだ始末がいいが、音曲は人に隠しちゃ出来ないものだからね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが……」

「ちょっと待った。音さえ出なけりゃと云うが、音が出なくても隠し了せないのがあるよ。昔僕等が小石川の御寺で自炊をしている時分に鈴木の藤さんと云う人がいてね、この藤さんが

たいへんみりん  
大変味淋がすきで、ビールの徳利とっくりへ味淋かを買きって来ては一人ひとりで楽しみたのに飲んでのいたのさ。あ  
る日藤ひさんが散歩さんぽに出たあとで、よせばいいのに苦沙弥くしゃみ君がちょっと盗ぬすんで飲んだところが  
……」

「おれが鈴木きみの味淋しゅじんなどをのむものか、飲んだのは君だぜ」と主人とつぜんは突然大きな声おおを出し  
た。

「おや本ほんを読よんでるから大丈夫だいじょうぶかと思おもったら、やはり聞きいてるね。油断ゆだんの出来できない男おとこだ。耳  
も八丁はっちょう、目も八丁め はっちょうとは君ことの事だ。なるほど云いわれて見みると僕ぼくも飲んだ。僕も飲んだには  
相違そういないが、発覚はっかくしたのは君ほうの方だよ。——両りょうくん君きみまあ聞ききたまえ。苦沙弥せんせい先生元来酒がんらいは飲  
めないだよ。ところを人の味淋いっしょうけんめいだと思おもって一生懸命いっしょうけんめいに飲んだものだから、さあ大変、  
顔かお中真赤じゅうまっかにはれ上あがってね。いやもう二目ふためとは見みられないありさまさ……」

「黙だまっている。羅甸語ラテンゴも読くめない癖せに」

「ハハハハ、それで藤かえさんが帰きって来てビールの徳利ほんぶんをふって見いじょうた  
ると、半分以上はんぶんいじょうた足りない。  
なん だれ 何でも誰なか飲みまわんだに相違たいしょうすみないと云しゅでいうので見廻ねして見みると、大将隅たいしょうすみの方に朱泥しゅでいを練ねりかためた  
にんぎょう  
人形にんぎょうのようにかたくなっていらいあね……」

さんじん おも 三人さんじんは思おもわず哄然こうぜんと笑わらい出した。主人だも本ほんをよみながら、くすくすと笑しゅじんった。独わらり独ひと仙君どくせんくん  
いた きがい き ろう す に至しゅうしょうひろうっては機外みの機みを弄ごばんし過ぎて、少うえ々うえ疲うえ労うえしたと見みえて、碁盤ごばんの上うえへのしかかかって、い  
つまの間にやまら、ぐねうぐねう寝ねている。

「まだ音おとがしないもので露見ろけんした事ことがある。僕ぼくが昔むかし姥子うばこの温泉おんせんに行いって、一人ひとりのじじいと  
あいやど 相宿あいやどになった事ことがある。何でも東なん京とうきょうの呉服屋ごふくやの隠居いんきょか何なんかだったがね。まあ相宿なんだから呉  
服屋ふるぎやだろうが、古着屋ふるぎやだろうが構かまう事ことはないが、ただ困こまった事ことが一つ出来ひとてしまった。と云できう  
のは僕ぼくは姥子つへ着みいてから三日目みに煙草たばこを切きらしてしましったのさ。諸君しよくんも知しってるだろうが、  
あやまの姥子なかと云いうのは山いっけんやの中なかの一軒屋いっけんやでただ温泉はいに這入めしって飯くを食くうよりほかにどうもこうも  
しょう おふべん ところ 仕様しょうのない不便ふべんの所ところさ。そこで煙草ごなんを切きらしたのだから御難ごなんだね。物ものはないとななるとななお欲ほ  
しくなるもので、煙草おもがないなと思おもうやいなや、いつもそんなでないのが急きゅうに吞のみたくなり  
だ いじ 出いしてね。意地いじのわるい事ことに、そのじじいふろしきが風呂敷いっばいに一杯ようい煙草とざんを用意よういして登山とざんしているのさ。  
それをすこすこずつ出だしては、人ひとの前まえで胡坐あぐらをかいて吞のみたいだろうと云いわないばかりに、すばす

ぱふかすのだね。ただふかすだけなら<sup>かんべん</sup>勘弁のしようもあるが、しまいには<sup>けむり</sup>煙を<sup>わ</sup>輪に<sup>ふ</sup>吹いて<sup>み</sup>見たり、<sup>たて</sup>豎に<sup>よこ</sup>吹いたり、<sup>ないし</sup>乃至は<sup>かんたんゆめ</sup>邯鄲夢の<sup>まくら</sup>枕と<sup>ぎやく</sup>逆に<sup>はな</sup>吹いたり、または<sup>し</sup>鼻から<sup>ほらい</sup>獅子の<sup>ほらがえ</sup>洞入り、<sup>の</sup>洞返りに吹いたり。つまり<sup>の</sup>呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云うのは」

「<sup>いしょうどうぐ</sup>衣装道具なら<sup>み</sup>見せびらかすのだが、<sup>の</sup>煙草だから<sup>の</sup>呑みびらかすのさ」

「へえ、そんな<sup>くる</sup>苦しい<sup>おも</sup>思いを<sup>もら</sup>なさるより<sup>の</sup>貰ったらいいでしょ」

「ところが<sup>だんし</sup>貰わないね。僕も<sup>の</sup>男子だ」

「へえ、貰っちゃいけないんですか」

「<sup>し</sup>いけるかも<sup>し</sup>知れないが、<sup>の</sup>貰わないね」

「それでどうしました」

「<sup>ぬす</sup>貰わないで<sup>の</sup>偷んだ」

「おやおや」

「<sup>やっこ</sup>奴さん<sup>てぬぐい</sup>手拭を<sup>ゆ</sup>ぶらさげて<sup>で</sup>湯に<sup>か</sup>出掛けたから、<sup>の</sup>呑むなら<sup>おも</sup>ここだと思っ<sup>いっしんふらんた</sup>て一心不乱立<sup>た</sup>てつづけに<sup>ゆかい</sup>呑んで、ああ<sup>ま</sup>愉快だと思<sup>しょうじ</sup>う間もなく、<sup>の</sup>障子が<sup>ふ</sup>からりと<sup>かえ</sup>あいたから、<sup>たばこ</sup>おやと<sup>の</sup>振り返ると<sup>の</sup>煙草の<sup>も</sup>持ち<sup>ぬし</sup>主さ」

「湯には這入らなかつたのですか」

「<sup>はい</sup>這入ろうと思<sup>きんちゃく</sup>ったら<sup>わす</sup>巾着を<sup>き</sup>忘れたのに<sup>の</sup>気が<sup>ろうか</sup>ついて、<sup>ひ</sup>廊下から<sup>かえ</sup>引き返したんだ。<sup>ひと</sup>人が<sup>の</sup>巾着でも<sup>だいいち</sup>とりや<sup>しっけい</sup>しまいし<sup>の</sup>第一<sup>の</sup>それから<sup>の</sup>失敬さ」

「<sup>なん</sup>何とも<sup>い</sup>云え<sup>おてぎわ</sup>ませんね。煙草の<sup>の</sup>御手際<sup>じゃ</sup>じゃ」

「<sup>がんしき</sup>ハハハハ<sup>の</sup>じいも<sup>の</sup>なかなか<sup>の</sup>眼識<sup>の</sup>があるよ。巾着は<sup>の</sup>とにかく<sup>の</sup>だが、<sup>の</sup>じいさんが<sup>の</sup>障子を<sup>の</sup>あけると<sup>の</sup>二日間の<sup>の</sup>溜め<sup>の</sup>呑みを<sup>の</sup>やった<sup>の</sup>煙草の<sup>の</sup>煙りが<sup>の</sup>むっと<sup>の</sup>するほど<sup>の</sup>室の<sup>の</sup>なかに<sup>の</sup>籠<sup>の</sup>ってる<sup>の</sup>じゃないか、<sup>の</sup>悪事<sup>の</sup>せんり千里とは<sup>の</sup>よく<sup>の</sup>云<sup>の</sup>ったもの<sup>の</sup>だね。たちまち<sup>の</sup>露見<sup>の</sup>して<sup>の</sup>しまった」

「じいさん何とかいいましたか」

「さすが年の功だね、何にも言わずに巻煙草を五六十本半紙にくるんで、失礼ですが、こんな粗葉でよろしければどうぞお呑み下さいましと云って、また湯壺へ下りて行ったよ」

「そんなのが江戸趣味と云うのでしょうか」

「江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、それから僕は爺さんと大に肝胆相照らして、二週間の間面白く逗留して帰って来たよ」

「煙草は二週間中爺さんの御馳走になったんですか」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はようやく本を伏せて、起き上りながらついに降参を申し込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちょうどいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの碁盤の上で昼寝をしている先生——何とか云いましたね、え、独仙先生、——独仙先生にも聞いていただきたいな。どうですあんなに寝ちゃ、からだに毒ですぜ。もう起してもいいでしょう」

「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。起きるんだよ。そう寝ちゃ毒だとき。奥さんが心配だとさ」

「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山羊髯を伝わって垂涎が一筋長々と流れて、蝸牛の這った迹のように歴然と光っている。

「ああ、眠かった。山上の白雲わが懶きに似たりか。ああ、いい心持ちに寝たよ」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちっと起きちゃどうだい」

「もう、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを——どうするんだったかな、苦沙弥君」



「どうするのかな、とんと見当がつかない」

「これからいよいよ弾くところですよ」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ。こっちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

「君は無絃の素琴を弾ずる連中だから困らない方なんだが、寒月君のは、きいきいびいびい  
近所合壁へ聞えるのだから大に困ってるよ」

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイオリンを弾く方を知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺いたいもので」

「伺わなくても露地の白牛を見ればすぐ分るはずだが」と、何だか通じない事を云う。  
寒月君はねぼけてあんな珍語を弄するのだろうと鑑定したから、わざと相手にならないで  
話頭を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日は天長節だから、朝からうちにいて、つ  
づらの蓋をとって見たり、かぶせて見たり一日そわそわして暮らしてしまいましたがいよいよ  
日が暮れて、つづらの底で蟬が鳴き出した時思い切って例のヴァイオリンと弓を取り出  
しました」

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅多に弾くとあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「まず弓を取って、切先から鏝元までしらべて見る……」

「下手な刀屋じゃあるまいし」と迷亭君が冷評した。

「実際これが自分の魂だと思おうと、侍が研ぎ澄した名刀を、長夜の灯影で鞘払をする  
時のような心持ちがするものですよ。私は弓を持ったままぶるぶるとふるえました」

「<sup>まった てんさい</sup>全く天才だ」と云う東風君について「<sup>てんかん</sup>全く癩癩だ」と迷亭君がつけた。主人は「<sup>しゅじん はや</sup>早く弾いたらよかろう」と云う。<sup>どくせん こま</sup>独仙君は困ったものだと云う<sup>かおつき</sup>顔付をする。

「<sup>ぶなん</sup>ありがたい事に弓は無難です。<sup>こんど</sup>今度はヴァイオリンを<sup>おな</sup>同じくランプの<sup>そば ひ つ</sup>傍へ引き付けて、<sup>うらおもてとも</sup>裏表共よくしらべて見る。この<sup>あいだやくごふんかん</sup>間約五分間、<sup>しじゅう</sup>つづらの底では始終蟬が鳴いていると思って<sup>くだ</sup>下さい。……」

「<sup>あんしん</sup>何とでも思ってやるから安心して弾くがいい」

「<sup>さいわ</sup>まだ弾きやしません。——<sup>きず</sup>幸いヴァイオリンも疵がない。これなら<sup>だいじょうぶ</sup>大丈夫とぬくと<sup>たち</sup>立ち上がる……」

「<sup>ゆ</sup>どっかへ行くのかい」

「<sup>すこ だま き くだ</sup>まあ少し黙って聞いて下さい。そう<sup>いっくごと じゃま</sup>一句毎に邪魔をされちゃ<sup>はなし で き</sup>話が出来ない。……」

「<sup>しよくん</sup>おい諸君、だまるんだとさ。シーシー」

「<sup>きみ</sup>しゃべるのは君だけだぜ」

「<sup>しっけい きんちようきんちよう</sup>うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

「<sup>こわき か こ ぞうり つつ</sup>ヴァイオリンを小脇に抱い込んで、<sup>にさんぼくさ と で</sup>草履を突かけたまま二三歩草の戸を出たが、<sup>……</sup>ましてしばし……」

「<sup>なん ていでん ちがい おも</sup>そらおいでなすった。何でも、どっかで停電するに<sup>……</sup>違ないと思った」

「<sup>かえ あまぼ かき</sup>もう帰ったって<sup>……</sup>甘干しの柿はないぜ」

「<sup>しよせんせい お かえ</sup>そう諸先生が御ませ返しになっては<sup>いかん いた</sup>はなはだ遺憾の<sup>とうふうくんひとり あいて</sup>至りだが、東風君一人を相手にするより<sup>いた かた</sup>致し方がない。——<sup>ひ かえ</sup>いいかね東風君、二三歩出たがまた引き返して、<sup>くに</sup>国を出るとき<sup>さんえん</sup>三円<sup>にじいっせん か あかげつと あたま かぶ</sup>二十銭で買った赤毛布を頭から<sup>け</sup>被ってね、<sup>まつくらやみ</sup>ふっとランプを消すと君<sup>こんど</sup>真暗闇になって今度は<sup>ありか はんぜん</sup>草履の所在地が判然しなくなった」

「<sup>いったい</sup>一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまい。ようやくの事<sup>こと</sup>草履<sup>み</sup>を見つけて、表<sup>おもて</sup>へ出ると星月夜<sup>ほしづきよ</sup>に柿落葉<sup>かきおちば</sup>、赤毛布<sup>あかぬい</sup>にヴァイオリン<sup>みぎ</sup>。右<sup>みぎ</sup>へ右<sup>みぎ</sup>へと爪先<sup>つまさき</sup>上<sup>あが</sup>りに庚申山<sup>こうしんやま</sup>へ差<sup>さ</sup>しかかってくると、東嶺寺<sup>とうれいじ</sup>の鐘<sup>かね</sup>がポーンとけつととお<sup>と</sup>みみ<sup>み</sup>を通して、頭<sup>なか</sup>の中<sup>なか</sup>へ響<sup>ひび</sup>き渡<sup>わた</sup>った。何時<sup>なんじ</sup>だと思う、君」

「<sup>し</sup>知らないね」

「<sup>くじ</sup>九時だよ。これから秋<sup>あき</sup>の夜長<sup>よなが</sup>をたった一人<sup>ひとり</sup>、山道<sup>やまみち</sup>八丁<sup>はちちやう</sup>を大平<sup>おおだいら</sup>と云う所<sup>い</sup>まで登<sup>のぼ</sup>るのだが、平生<sup>へいぜい</sup>なら臆病<sup>おくびやう</sup>な僕<sup>ぼく</sup>の事<sup>こと</sup>だから、恐<sup>おそろ</sup>しくってたまらないところだけれども、一心<sup>いっしん</sup>不乱<sup>ふらん</sup>となると不思議<sup>ふしぎ</sup>なもので、怖<sup>こわ</sup>いにも怖<sup>こわ</sup>くないにも、毛頭<sup>もうとう</sup>そんな念<sup>ねん</sup>はてんで心<sup>こころ</sup>の中に起<sup>おこ</sup>らないよ。ただヴァイオリン<sup>ひ</sup>が弾<sup>むね</sup>きたいばかりで胸<sup>むね</sup>が一杯<sup>いっぱい</sup>になってるんだから妙<sup>みよう</sup>なものさ。この大平<sup>こうしんやま</sup>と云う所<sup>みなみがわ</sup>は庚申山<sup>てんき</sup>の南<sup>ひ</sup>側<sup>のぼ</sup>で天気<sup>み</sup>のいい日<sup>あかまつ</sup>に登<sup>あいだ</sup>って見<sup>じやうか</sup>ると赤松<sup>ひとめ</sup>の間<sup>み</sup>から城下<sup>あかまつ</sup>が一目<sup>あいだ</sup>に見<sup>じやうか</sup>下<sup>ひとめ</sup>せる眺<sup>みおろ</sup>望<sup>ちやうぼう</sup>佳<sup>かせつ</sup>絶<sup>へいち</sup>の平地<sup>ひらち</sup>で——そうさ広<sup>ひろ</sup>さはまあ百<sup>ひやく</sup>坪<sup>つぼ</sup>もあろうかね、真中<sup>まんなか</sup>に八<sup>はち</sup>畳<sup>じやう</sup>敷<sup>じき</sup>ほどな一枚<sup>いちまい</sup>岩<sup>いわ</sup>があつて、北側<sup>きたがわ</sup>は鶺鴒<sup>う</sup>の沼<sup>ぬま</sup>と云う池<sup>いけ</sup>つづきで、池<sup>いけ</sup>のまわりは三<sup>さん</sup>抱<sup>が</sup>えもあろうと云う樟<sup>くすのき</sup>ばかりだ。山<sup>やま</sup>のなかだから、人<sup>ひと</sup>の住<sup>す</sup>んでる所<sup>しやうのう</sup>は樟<sup>と</sup>脳<sup>こ</sup>を採<sup>いっけん</sup>る小屋<sup>こや</sup>が一軒<sup>いっけん</sup>あるばかり、池<sup>きんべん</sup>の近<sup>ひる</sup>辺<sup>こころ</sup>は昼<sup>も</sup>でもあまり心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>ちのいい場<sup>ばしよ</sup>所<sup>さいわ</sup>じゃない。幸<sup>さいわ</sup>い工兵<sup>こうへい</sup>が演<sup>えん</sup>習<sup>しゆ</sup>のため道<sup>みち</sup>を切<sup>き</sup>り開<sup>ひら</sup>いてくれたから、登<sup>ぼね</sup>るのに骨<sup>お</sup>は折<sup>う</sup>れな<sup>え</sup>い。ようやく一枚<sup>き</sup>岩<sup>けつと</sup>の上<sup>し</sup>へ来<sup>き</sup>て、毛布<sup>けつと</sup>を敷<sup>し</sup>いて、ともかくもその上<sup>すわ</sup>へ坐<sup>さむ</sup>った。こんな寒<sup>ばん</sup>い晩<sup>ばん</sup>に登<sup>はじ</sup>ったのは始<sup>はじめ</sup>めてなんだから、岩<sup>は</sup>の上<sup>じ</sup>へ坐<sup>すこ</sup>って少<sup>すこ</sup>し落<sup>お</sup>ち着<sup>お</sup>くと、あたり<sup>さみ</sup>の淋<sup>しだい</sup>しさが次第<sup>しだい</sup>次第<sup>しだい</sup>に腹<sup>はら</sup>の底<sup>そこ</sup>へ沁<sup>し</sup>み渡<sup>わた</sup>る。こう云<sup>う</sup>う場<sup>ば</sup>合<sup>あい</sup>に人<sup>こころ</sup>の心<sup>みだ</sup>を乱<sup>こころ</sup>すものはただ怖<sup>かん</sup>いと云<sup>かん</sup>う感<sup>ひ</sup>じばかりだから、この感<sup>ひ</sup>じさえ引<sup>ひ</sup>き抜<sup>ぬ</sup>くと、余<sup>あま</sup>るところは咬<sup>こう</sup>々<sup>こう</sup>冽<sup>れつ</sup>々<sup>れつ</sup>たる空<sup>くう</sup>霊<sup>れい</sup>の気<sup>き</sup>だけになる。二十<sup>にじふ</sup>分<sup>ぶん</sup>ほど茫<sup>ぼう</sup>然<sup>ぜん</sup>としてい<sup>なん</sup>るうちに何<sup>なん</sup>だか水<sup>すい</sup>晶<sup>しやう</sup>で造<sup>つく</sup>った御<sup>ご</sup>殿<sup>てん</sup>のなかに、たつた一人<sup>ひとり</sup>住<sup>す</sup>んでるよ<sup>よ</sup>うな気<sup>き</sup>になつた。しかもその一人<sup>ひとり</sup>住<sup>す</sup>んでる僕<sup>ぼく</sup>のからだが——いやからだばかりじゃない、心<sup>こころ</sup>も魂<sup>たましい</sup>もことごとく寒<sup>かん</sup>天<sup>てん</sup>か何<sup>なに</sup>かで製<sup>せい</sup>造<sup>ぞう</sup>されたごとく、不思議<sup>ふしぎ</sup>に透<sup>す</sup>き徹<sup>と</sup>つてしまつて、自分<sup>じぶん</sup>が水<sup>みづ</sup>晶<sup>しやう</sup>の御<sup>ご</sup>殿<sup>てん</sup>の中<sup>なか</sup>にい<sup>い</sup>るのだから、自分<sup>じぶん</sup>の腹<sup>はら</sup>の中<sup>なか</sup>に水<sup>みづ</sup>晶<sup>しやう</sup>の御<sup>ご</sup>殿<sup>てん</sup>があるのだから、わからなくなつて来<sup>き</sup>た……」

「<sup>と</sup>飛<sup>と</sup>んだ事<sup>こと</sup>になつて来<sup>き</sup>たね」と迷<sup>めいて</sup>亭<sup>いん</sup>君<sup>くん</sup>が真<sup>ま</sup>面<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>にからかうあとに付<sup>つ</sup>いて、独<sup>どく</sup>仙<sup>せん</sup>君<sup>くん</sup>が「面白<sup>おもしろ</sup>い境界<sup>きやうがい</sup>だ」と少<sup>すこ</sup>しく感<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>したよ<sup>よ</sup>うすに見<sup>み</sup>えた。

「もしこの状<sup>じやう</sup>態<sup>たい</sup>が長<sup>なが</sup>くつづいたら、私<sup>わたくし</sup>はあすの朝<sup>あさ</sup>まで、せつかくのヴァイオリン<sup>ひ</sup>も弾<sup>ひ</sup>かず、茫<sup>ぼん</sup>やり一枚<sup>いちまい</sup>岩<sup>いわ</sup>の上<sup>う</sup>に坐<sup>すわ</sup>つてたかもしら<sup>し</sup>ないです……」

「狐<sup>きつね</sup>でもいる所<sup>ところ</sup>かい」と東風<sup>とうふう</sup>君がきいた。

「こう云う具<sup>ぐ</sup>合<sup>あい</sup>で、自<sup>じ</sup>他<sup>た</sup>の区<sup>く</sup>別<sup>べつ</sup>もなくなつて、生<sup>い</sup>きてい<sup>し</sup>るか死<sup>し</sup>んでい<sup>し</sup>るか方<sup>ほう</sup>角<sup>かく</sup>のつ<sup>と</sup>か<sup>き</sup>ない時<sup>とき</sup>に、突<sup>とつ</sup>然<sup>ぜん</sup>後<sup>うし</sup>ろの古<sup>ふる</sup>沼<sup>ぬま</sup>の奥<sup>おく</sup>でギヤ<sup>ぎ</sup>ーと云<sup>こ</sup>う声<sup>え</sup>がした。……」

「いよいよ出<sup>で</sup>たね」

「その声<sup>こゑ</sup>が遠<sup>とお</sup>く反<sup>はん</sup>響<sup>きやう</sup>を起<sup>おこ</sup>して満<sup>まん</sup>山<sup>ざん</sup>の秋<sup>あき</sup>の梢<sup>こずえ</sup>を、野<sup>の</sup>分<sup>わけ</sup>と共<sup>とも</sup>に渡<sup>わた</sup>つたと思<sup>おも</sup>つたら、はつと我<sup>われ</sup>に帰<sup>かえ</sup>つた……」

「や<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>し<sup>ん</sup>した」と迷<sup>む</sup>亭<sup>ね</sup>君<sup>な</sup>が胸<sup>むね</sup>を撫<sup>な</sup>で<sup>ま</sup>お<sup>ま</sup>ろ<sup>ね</sup>す真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>を<sup>し</sup>る。

「大<sup>たい</sup>死<sup>し</sup>一<sup>い</sup>番<sup>ぱん</sup>乾<sup>けん</sup>坤<sup>こん</sup>新<sup>あらた</sup>なり」と独<sup>め</sup>仙<sup>せん</sup>君<sup>くん</sup>は目<sup>め</sup>くば<sup>せ</sup>を<sup>し</sup>る。寒<sup>かん</sup>月<sup>げつ</sup>君<sup>くん</sup>にはち<sup>つ</sup>つと<sup>つ</sup>も通<sup>つう</sup>じ<sup>ない</sup>ない。

「それから、我<sup>われ</sup>に帰<sup>かえ</sup>つてあ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>を見<sup>み</sup>廻<sup>まわ</sup>す<sup>す</sup>と、庚<sup>こう</sup>申<sup>しん</sup>山<sup>やま</sup>一<sup>い</sup>面<sup>めん</sup>はし<sup>し</sup>ん<sup>と</sup>して、雨<sup>あ</sup>ま<sup>だ</sup>垂<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ほ<sup>ほ</sup>ど<sup>ど</sup>の音<sup>おと</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>ない。は<sup>は</sup>て<sup>て</sup>な<sup>な</sup>今<sup>いま</sup>の音<sup>ね</sup>は<sup>なん</sup>何<sup>なに</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と考<sup>かん</sup>え<sup>え</sup>た。人<sup>ひと</sup>の<sup>こゑ</sup>声<sup>こゑ</sup>に<sup>して</sup>は<sup>は</sup>鋭<sup>えい</sup>す<sup>ず</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>る<sup>る</sup>し、鳥<sup>とり</sup>の<sup>こゑ</sup>声<sup>こゑ</sup>に<sup>して</sup>は<sup>は</sup>大<sup>おほ</sup>き<sup>き</sup>過<sup>す</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>る<sup>る</sup>し、猿<sup>さる</sup>の<sup>こゑ</sup>声<sup>こゑ</sup>に<sup>して</sup>は<sup>は</sup>——この<sup>へん</sup>辺<sup>へん</sup>によ<sup>よ</sup>も<sup>も</sup>や猿<sup>さる</sup>は<sup>お</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>い。何<sup>なに</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>? 何<sup>なに</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と云<sup>い</sup>う<sup>う</sup>問<sup>もん</sup>題<sup>だい</sup>が<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>なか</sup>に<sup>お</sup>こ<sup>こ</sup>ると、こ<sup>こ</sup>れ<sup>を</sup>解<sup>かい</sup>釈<sup>しゃく</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>う</sup>と云<sup>い</sup>う<sup>う</sup>ので今<sup>いま</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>し</sup>ず<sup>ず</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>返<sup>かえ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>い</sup>た<sup>や</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>が<sup>ふん</sup>紛<sup>ふん</sup>然<sup>ぜん</sup>雑<sup>ざつ</sup>然<sup>ぜん</sup>糅<sup>じゅう</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>して</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>コ<sup>こ</sup>ン<sup>ん</sup>ノ<sup>の</sup>ト<sup>と</sup>殿<sup>でん</sup>下<sup>か</sup>歓<sup>かん</sup>迎<sup>げい</sup>の<sup>とう</sup>当<sup>とう</sup>時<sup>じ</sup>に<sup>お</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>都<sup>と</sup>人<sup>じん</sup>士<sup>し</sup>狂<sup>きやう</sup>乱<sup>らん</sup>の<sup>たい</sup>態<sup>たい</sup>度<sup>ど</sup>を<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>の</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>。そ<sup>そ</sup>の<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>に<sup>し</sup>ん<sup>しん</sup>の<sup>け</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>き<sup>き</sup>ゅう<sup>ゅう</sup>に<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>て、<sup>しょう</sup>焼<sup>しょう</sup>酎<sup>ちゅう</sup>を<sup>ふ</sup>吹<sup>ふ</sup>き<sup>か</sup>け<sup>か</sup>た<sup>た</sup>毛<sup>け</sup>脛<sup>けい</sup>の<sup>よう</sup>よ<sup>う</sup>に、<sup>ゆう</sup>勇<sup>ゆう</sup>気<sup>き</sup>、<sup>たん</sup>胆<sup>たん</sup>力<sup>りき</sup>、<sup>ぶん</sup>分<sup>ぶん</sup>別<sup>べつ</sup>、<sup>ちん</sup>沈<sup>ちん</sup>着<sup>ちゃく</sup>な<sup>ごう</sup>ど<sup>ごう</sup>と<sup>き</sup>号<sup>ごう</sup>す<sup>る</sup>お<sup>く</sup>客<sup>きゃく</sup>様<sup>さま</sup>が<sup>す</sup>う<sup>す</sup>う<sup>と</sup>蒸<sup>じょう</sup>発<sup>はつ</sup>して<sup>ゆ</sup>行<sup>ゆ</sup>く。<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>臓<sup>ぞう</sup>が<sup>ろ</sup>っ<sup>こ</sup>つ<sup>した</sup>で<sup>お</sup>ステ<sup>お</sup>テ<sup>だ</sup>コ<sup>りょう</sup>を<sup>あ</sup>踊<sup>あ</sup>り<sup>した</sup>出<sup>た</sup>す。両<sup>りょう</sup>足<sup>あし</sup>が<sup>た</sup>紙<sup>た</sup>鳶<sup>こ</sup>の<sup>う</sup>な<sup>り</sup>の<sup>よう</sup>に<sup>しん</sup>震<sup>しん</sup>動<sup>どう</sup>を<sup>は</sup>じ<sup>め</sup>る。こ<sup>こ</sup>れ<sup>は</sup>は<sup>た</sup>ま<sup>ら</sup>ん。い<sup>け</sup>き<sup>と</sup>なり、<sup>あ</sup>毛<sup>あ</sup>布<sup>ま</sup>を<sup>こ</sup>頭<sup>こ</sup>か<sup>ら</sup>か<sup>ぶ</sup>つ<sup>て</sup>、<sup>こ</sup>ヴァ<sup>こ</sup>イ<sup>か</sup>オリ<sup>か</sup>ンを<sup>こ</sup>小<sup>こ</sup>脇<sup>わき</sup>に<sup>か</sup>抱<sup>か</sup>い<sup>こ</sup>込<sup>こ</sup>んで<sup>ひ</sup>よ<sup>ろ</sup>ひ<sup>ひ</sup>よ<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>一<sup>い</sup>枚<sup>まい</sup>岩<sup>い</sup>を<sup>と</sup>飛<sup>と</sup>び<sup>お</sup>り<sup>て</sup>、<sup>い</sup>一<sup>い</sup>目<sup>もく</sup>散<sup>さん</sup>に<sup>や</sup>山<sup>やま</sup>道<sup>みち</sup>八<sup>は</sup>丁<sup>ちやう</sup>を<sup>ふ</sup>麓<sup>ふもと</sup>の<sup>ほう</sup>方<sup>ほう</sup>へ<sup>お</sup>か<sup>か</sup>け<sup>お</sup>下<sup>やど</sup>り<sup>て</sup>、<sup>ふ</sup>宿<sup>ふ</sup>へ<sup>ふ</sup>帰<sup>ふ</sup>つ<sup>て</sup>布<sup>ふ</sup>団<sup>とん</sup>へ<sup>く</sup>る<sup>ま</sup>つ<sup>て</sup>寝<sup>ね</sup>て<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>た<sup>つ</sup>た。今<sup>いま</sup>考<sup>かん</sup>え<sup>え</sup>て<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>気<sup>き</sup>味<sup>み</sup>の<sup>わ</sup>る<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>た</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>な</sup>い<sup>い</sup>よ、東<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup>君<sup>くん</sup>」

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾<sup>ひ</sup>かないのかい」

「弾<sup>き</sup>たく<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>ても、弾<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>ない<sup>い</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>ない<sup>い</sup>か。ギヤ<sup>ぎ</sup>ーだ<sup>だ</sup>もの。君<sup>きみ</sup>だ<sup>だ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>き</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>弾<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>ない<sup>い</sup>よ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君は一座を見廻わして大得意のようである。

「ハハハハこれは上出来。そこまで持つて行くにはだいぶ苦心惨憺たるものがあつたのだらう。僕は男子のサンドラ・ベロニが東方君子の邦に出現するところかと思つて、今が今まで真面目に拝聴していたんだよ」と云つた迷亭君は誰かサンドラ・ベロニの講釈でも聞かかと思のほか、何にも質問が出ないので「サンドラ・ベロニが月下に堅琴を弾いて、以太利亜風の歌を森の中でうたつてるところは、君の庚申山へヴァイオリンをかかえて上るところと同曲にして異巧なるものだね。惜しい事に向うは月中の嫦娥を驚ろかし、君は古沼の怪狸におどろかされたので、際どいところで滑稽と崇高の大差を来たした。さぞ遺憾だらう」と一人で説明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外平気である。

「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやるから、おどかされるんだ」と今度は主人が酷評を加えると、

「好漢この鬼窟裏に向つて生計を営む。惜しい事だ」と独仙君は嘆息した。すべて独仙君の云う事は決して寒月君にわかつたためしがない。寒月君ばかりではない、おそらく誰にでもわからないだらう。

「そりゃ、そうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行つて珠ばかり磨いてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を転じた。

「いえ、こないだうちから国へ帰省していたものですから、暫時中止の姿です。珠ももうあきましたから、実はよそうかと思つてるんです」

「だって珠が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人は少しく眉をひそめたが、本人は存外気楽で、

「博士ですか、エヘヘヘ。博士ならもうならなくつてもいいんです」

「でも結婚が延びて、双方困るだろう」

「結婚って誰の結婚です」

「君のさ」

「私 が誰と結婚するんです」

「金田の令嬢さ」

「へええ」

「へえって、あれほど約束があるじゃないか」

「約束なんかありやしません、そんな事を言い触らすなあ、向うの勝手です」

「こいつは少し乱暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件は知ってるだろう」

「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知ってるばかりじゃない、公然の秘密として天下一般に知れ渡ってる。現に万朝なぞでは花婿花嫁と云う表題で両君の写真を紙上に掲ぐるの栄はいつだろう、いつだろうって、うるさく僕のところへ聞きにくるくらいだ。東風君なぞはすでに鴛鴦歌と云う一大長篇を作って、三箇月前から待ってるんだが、寒月君が博士にならないばかりで、せっかくの傑作も宝の持ち腐れになりそうで心配でたまらないそうだ。ねえ、東風君そうだろう」

「まだ心配するほど持ちあつかつてはいませんが、とにかく満腹の同情をこめた作を公けにするつもりです」

「それ見たまえ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。少ししっかりして、珠を磨いてくれたまえ」

「へへへいろいろ御心配をかけて済みませんが、もう博士にはならないでもいいのです」

「なぜ」

「なぜって、私にはもう歴然とした女房があるんです」

「いや、こりゃえらい。いつの間に秘密結婚をやったのかね。油断のならない世の中だ。  
くしゃみ いまおき およ とお かんげつくん さいし  
苦沙弥さんただ今御聞き及びの通り寒月君はすでに妻子があるんだとさ」

「子供はまだですよ。そう結婚して一と月もたないうちに子供が生まれちゃ事できあ」

「元来いつどこで結婚したんだ」と主人は予審判事見たような質問をかける。

「いつって、国へ帰ったら、ちゃんと、うちで待ってたのです。今日先生の所へ持って来  
かつぶし いわい しんるい もら  
た、この鯉節は結婚祝に親類から貰ったんです」

「たった三本祝うのはけちな」

「なに沢山のうちを三本だけ持って来たのです」

「じゃ御国の女だね、やっぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」

「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりゃ少し義理がわるかろう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりや同じ事だ。どうせ夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをする  
ようなものだ。要するに鉢合せをしないで済むところをわざわざ鉢合せるんだから余計な事  
さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なのは鴛鴦歌  
つく とうふう  
を作った東風君くらいなものさ」

「なに鴛鴦歌は都合によって、こちらへ向け易えてもよろしゅうございます。金田家の結婚式  
にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあって自由自在なものだね」

「金田の方へ断わったかい」と主人はまだ金田を気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれとも、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はありませんから、黙っていれば沢山です。——なあに黙ってても沢山ですよ。今時分は探偵が十人も二十人もかかって一部始終残らず知れていますよ」

探偵と云う言語を聞いた、主人は、急に苦い顔をして

「ふん、そんなら黙っている」と申し渡したが、それでも飽き足らなかつたと見えて、なお探偵について下のような事をさも大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懐中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ間に雨戸をはずして人の所有品を偷むのが泥棒で、知らぬ間に口を滑らして人の心を読むのが探偵だ。ダンビラを畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強うるのが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強盗の一族でどうてい人の風上に置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊伍を整えて襲撃したって怖くはありません。珠磨りの名人理学士水島寒月でさあ」

「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほどあつて元気旺盛なものだね。しかし苦沙弥さん。探偵がスリ、泥棒、強盗の同類なら、その探偵を使う金田君のごときものは何の同類だろう」

「熊坂長範くらいなものだろう」

「熊坂はよかつたね。一つと見えたる長範が二つになってぞ失せにけりと云うが、あんなからすがね、烏金で身代をつくった向横丁の長範なんかは業つく張りの、慾張り屋だから、いくつになつても失せる氣遣はないぜ。あんな奴につかまったら因果だよ。生涯たたるよ、寒月君用心したまえ」



「なあに、いいですよ。ああら物々し盗人よ。手並はさきにも知りつらん。それにも懲りず打ち入るかって、ひどい目に合せてやりまさあ」と寒月君は自若として宝生流に気燄を吐いて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいてい探偵のようになる傾向があるが、どう云う訳だろう」と独仙君は独仙君だけに時局問題には関係のない超然たる質問を呈出した。

「物価が高いせいでしょう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしょう」と東風君が答える。

「人間に文明の角が生えて、金米糖のようにいらいらするからさ」と迷亭君が答える。

今度は主人の番である。主人はもったい振った口調で、こんな議論を始めた。

「それは僕が大分考えた事だ。僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になっている。僕の自覚心と名づけるのは独仙君の方で云う、見性成仏とか、自己は天地と同一体だとか云う悟道の類ではない。……」

「おや大分むずかしくなって来たようだ。苦沙弥君、君にしてそんな大議論を舌頭に弄する以上は、かく申す迷亭も憚りながら御あとで現代の文明に対する不平を堂々と云うよ」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

「ところがある。大にある。君などはせんだつては刑事巡査を神のごとく敬い、また今日は探偵をスリ泥棒に比し、まるで矛盾の変怪だが、僕などは終始一貫父母未生以前からただ今に至るまで、かつて自説を変じた事のない男だ」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。せんだつてはせんだつてで今日は今日だ。自説が変らないのは発達しない証拠だ。下愚は移らずと云うのは君の事だ。……」

「これはきびしい。探偵もそうまともにくると可愛いところがある」

「おれが探偵」

「探偵でないから、<sup>しょうじき</sup>正直でいいと云うのだよ。<sup>けんか</sup>喧嘩はおやめおやめ。さあ。その大議論のあ  
とを<sup>はいちよう</sup>拝聴しよう」

「<sup>いま</sup>今の<sup>ひと</sup>人の<sup>じかくしん</sup>自覚心と云うのは<sup>い</sup>自己と<sup>たにん</sup>他人の<sup>あいだ</sup>間に<sup>せつぜん</sup>截然たる<sup>りがい</sup>利害の<sup>こうこう</sup>鴻溝があると云う<sup>こと</sup>事を知り  
<sup>す</sup>過ぎていと云う事だ。そうしてこの<sup>ぶんめい</sup>自覚心なるものは<sup>すず</sup>文明が<sup>いちにいちにち</sup>進むにしたがって一日一日と  
<sup>えいびん</sup>鋭敏になって行くから、<sup>ゆ</sup>しまいには<sup>いっきよしゅういっとうそく</sup>一挙手一投足も<sup>しぜんてんねん</sup>自然天然とは<sup>でき</sup>出来ないようになる。ヘン  
レーと云う人が<sup>ひょう</sup>スチーヴンソンを<sup>かれ</sup>評して<sup>かがみ</sup>彼は<sup>へ</sup>鏡の<sup>はい</sup>かかった<sup>まえ</sup>部屋に入<sup>とお</sup>って、<sup>ごと</sup>鏡の前を通る毎  
に<sup>かげ</sup>自己の<sup>うつ</sup>影を<sup>み</sup>写して<sup>き</sup>見なければ<sup>す</sup>気が<sup>しゅんじ</sup>済まぬほど<sup>わす</sup>瞬時も<sup>わす</sup>自己を<sup>わす</sup>忘るる事  
の<sup>きよう</sup>出来ない<sup>すうせい</sup>人だと<sup>い</sup>評した<sup>ね</sup>のは、よく<sup>さ</sup>今日の<sup>いた</sup>趨勢を<sup>いた</sup>言い<sup>いた</sup>あらわ<sup>いた</sup>している。<sup>いた</sup>寝ても<sup>いた</sup>おれ、<sup>いた</sup>覚めても<sup>いた</sup>おれ、<sup>いた</sup>この<sup>いた</sup>おれが<sup>いた</sup>至る  
ところにつけ<sup>じんげん</sup>まつ<sup>こういげんどう</sup>わっているから、<sup>じんこうてき</sup>人間の<sup>じんこうてき</sup>行為<sup>じんこうてき</sup>言動が<sup>じんこうてき</sup>人工的<sup>じんこうてき</sup>に<sup>じんこうてき</sup>コセ<sup>じんこうてき</sup>つ<sup>じんこうてき</sup>く<sup>じんこうてき</sup>ばかり、<sup>じんこうてき</sup>自分で  
<sup>きゅうくつ</sup>窮<sup>よ</sup>屈<sup>なか</sup>になる<sup>くる</sup>ばかり、<sup>みあい</sup>世の中が<sup>わか</sup>苦<sup>だんじよ</sup>しくなる<sup>ころも</sup>ばかり、<sup>ころも</sup>ちよ<sup>ころも</sup>うど<sup>ころも</sup>見<sup>ころも</sup>合<sup>ころも</sup>を<sup>ころも</sup>する<sup>ころも</sup>若<sup>ころも</sup>い<sup>ころも</sup>男<sup>ころも</sup>女<sup>ころも</sup>の<sup>ころも</sup>心<sup>ころも</sup>持<sup>ころも</sup>ち<sup>ころも</sup>で  
<sup>あさ</sup>朝<sup>ばん</sup>から<sup>ゆうゆう</sup>晩<sup>しょうよう</sup>まで<sup>じ</sup>く<sup>かく</sup>ら<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>な<sup>い</sup>け<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>な<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>な<sup>い</sup>い。<sup>い</sup>悠<sup>い</sup>々<sup>い</sup>と<sup>い</sup>か<sup>い</sup>従<sup>い</sup>容<sup>い</sup>と<sup>い</sup>か<sup>い</sup>云<sup>い</sup>う<sup>い</sup>字<sup>い</sup>は<sup>い</sup>劃<sup>い</sup>が<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>っ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>意<sup>い</sup>味<sup>い</sup>の<sup>い</sup>な<sup>い</sup>い  
<sup>ことば</sup>言葉<sup>てん</sup>にな<sup>きんたい</sup>って<sup>たんでいてき</sup>しま<sup>どろぼうてき</sup>う。<sup>ひと</sup>この<sup>ひと</sup>点<sup>ひと</sup>にお<sup>ひと</sup>いて<sup>ひと</sup>今<sup>ひと</sup>代<sup>ひと</sup>の<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>は<sup>ひと</sup>探<sup>ひと</sup>偵<sup>ひと</sup>的<sup>ひと</sup>で<sup>ひと</sup>あ<sup>ひと</sup>る。<sup>ひと</sup>泥<sup>ひと</sup>棒<sup>ひと</sup>的<sup>ひと</sup>で<sup>ひと</sup>あ<sup>ひと</sup>る。<sup>ひと</sup>探<sup>ひと</sup>偵<sup>ひと</sup>は<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>の  
<sup>め</sup>目<sup>め</sup>を<sup>め</sup>掠<sup>め</sup>め<sup>め</sup>て<sup>め</sup>自<sup>め</sup>分<sup>め</sup>だ<sup>め</sup>け<sup>め</sup>う<sup>め</sup>ま<sup>め</sup>い<sup>め</sup>事<sup>め</sup>を<sup>め</sup>し<sup>め</sup>よ<sup>め</sup>う<sup>め</sup>と<sup>め</sup>云<sup>め</sup>う<sup>め</sup>商<sup>め</sup>売<sup>め</sup>だ<sup>め</sup>か<sup>め</sup>ら、<sup>め</sup>勢<sup>め</sup>自<sup>め</sup>覚<sup>め</sup>心<sup>め</sup>が<sup>め</sup>強<sup>め</sup>く<sup>め</sup>な<sup>め</sup>ら<sup>め</sup>な<sup>め</sup>く<sup>め</sup>て<sup>め</sup>は<sup>め</sup>出<sup>め</sup>  
<sup>め</sup>来<sup>め</sup>ん。<sup>め</sup>泥<sup>め</sup>棒<sup>め</sup>も<sup>め</sup>捕<sup>め</sup>ま<sup>め</sup>る<sup>め</sup>か、<sup>め</sup>見<sup>め</sup>つ<sup>め</sup>か<sup>め</sup>る<sup>め</sup>か<sup>め</sup>と<sup>め</sup>云<sup>め</sup>う<sup>め</sup>心<sup>め</sup>配<sup>め</sup>が<sup>め</sup>念<sup>め</sup>頭<sup>め</sup>を<sup>め</sup>離<sup>め</sup>れる<sup>め</sup>事<sup>め</sup>が<sup>め</sup>な<sup>め</sup>い<sup>め</sup>か<sup>め</sup>ら、<sup>め</sup>勢<sup>め</sup>自<sup>め</sup>覚<sup>め</sup>心<sup>め</sup>が<sup>め</sup>強<sup>め</sup>  
<sup>め</sup>く<sup>め</sup>な<sup>め</sup>ら<sup>め</sup>ざ<sup>め</sup>る<sup>め</sup>を<sup>め</sup>得<sup>め</sup>ない。<sup>め</sup>今<sup>め</sup>の<sup>め</sup>人<sup>め</sup>は<sup>め</sup>ど<sup>め</sup>う<sup>め</sup>し<sup>め</sup>たら<sup>め</sup>己<sup>め</sup>れ<sup>め</sup>の<sup>め</sup>利<sup>め</sup>に<sup>め</sup>な<sup>め</sup>る<sup>め</sup>か、<sup>め</sup>損<sup>め</sup>に<sup>め</sup>な<sup>め</sup>る<sup>め</sup>か<sup>め</sup>と<sup>め</sup>寝<sup>め</sup>て<sup>め</sup>も<sup>め</sup>醒<sup>め</sup>め<sup>め</sup>て<sup>め</sup>も  
<sup>かんが</sup>考<sup>かんが</sup>え<sup>かんが</sup>つ<sup>かんが</sup>づ<sup>かんが</sup>け<sup>かんが</sup>だ<sup>かんが</sup>か<sup>かんが</sup>ら、<sup>かんが</sup>勢<sup>かんが</sup>探<sup>かんが</sup>偵<sup>かんが</sup>泥<sup>かんが</sup>棒<sup>かんが</sup>と<sup>かんが</sup>同<sup>かんが</sup>じ<sup>かんが</sup>く<sup>かんが</sup>自<sup>かんが</sup>覚<sup>かんが</sup>心<sup>かんが</sup>が<sup>かんが</sup>強<sup>かんが</sup>く<sup>かんが</sup>な<sup>かんが</sup>ら<sup>かんが</sup>ざ<sup>かんが</sup>る<sup>かんが</sup>を<sup>かんが</sup>得<sup>かんが</sup>ない。<sup>かんが</sup>二<sup>かんが</sup>六<sup>かんが</sup>時<sup>かんが</sup>中<sup>かんが</sup>キ<sup>かんが</sup>ョ<sup>かんが</sup>ト<sup>かんが</sup>キ<sup>かんが</sup>ョ<sup>かんが</sup>ト<sup>かんが</sup>、<sup>かんが</sup>コ<sup>かんが</sup>ソ<sup>かんが</sup>コ<sup>かんが</sup>ソ<sup>かんが</sup>し<sup>かんが</sup>て<sup>かんが</sup>墓<sup>かんが</sup>に<sup>かんが</sup>入<sup>かんが</sup>る<sup>かんが</sup>ま<sup>かんが</sup>で<sup>かんが</sup>一<sup>かんが</sup>刻<sup>かんが</sup>の<sup>かんが</sup>安<sup>かんが</sup>心<sup>かんが</sup>も<sup>かんが</sup>得<sup>かんが</sup>ない<sup>かんが</sup>のは<sup>かんが</sup>今<sup>かんが</sup>の<sup>かんが</sup>人<sup>かんが</sup>の<sup>かんが</sup>心<sup>かんが</sup>だ。<sup>かんが</sup>文<sup>かんが</sup>明<sup>かんが</sup>の<sup>かんが</sup>咒<sup>かんが</sup>詛<sup>かんが</sup>だ。  
<sup>ば</sup>馬<sup>ば</sup>鹿<sup>ば</sup>馬<sup>ば</sup>鹿<sup>ば</sup>しい」

「なるほど<sup>おもしろ</sup>面白い<sup>かいしゃく</sup>解<sup>どくせんくん</sup>釈<sup>い</sup>だ」と<sup>だ</sup>独<sup>もんだい</sup>仙<sup>もんだい</sup>君<sup>もんだい</sup>が<sup>もんだい</sup>云<sup>もんだい</sup>い<sup>もんだい</sup>出<sup>もんだい</sup>した。<sup>もんだい</sup>こ<sup>もんだい</sup>んな<sup>もんだい</sup>問<sup>もんだい</sup>題<sup>もんだい</sup>に<sup>もんだい</sup>な<sup>もんだい</sup>ると<sup>もんだい</sup>独<sup>もんだい</sup>仙<sup>もんだい</sup>君<sup>もんだい</sup>は<sup>もんだい</sup>な<sup>もんだい</sup>か<sup>もんだい</sup>な<sup>もんだい</sup>か  
<sup>ひっこ</sup>引<sup>おとこ</sup>込<sup>くしゃみ</sup>んで<sup>せつめい</sup>い<sup>わがい</sup>ない<sup>え</sup>男<sup>むか</sup>である。<sup>ひと</sup>「<sup>おの</sup>苦<sup>わす</sup>沙<sup>わす</sup>弥<sup>わす</sup>君<sup>わす</sup>の<sup>わす</sup>説<sup>わす</sup>明<sup>わす</sup>は<sup>わす</sup>よ<sup>わす</sup>く<sup>わす</sup>我<sup>わす</sup>意<sup>わす</sup>を<sup>わす</sup>得<sup>わす</sup>て<sup>わす</sup>い<sup>わす</sup>る。<sup>わす</sup>昔<sup>わす</sup>し<sup>わす</sup>の<sup>わす</sup>人<sup>わす</sup>は<sup>わす</sup>己<sup>わす</sup>れ<sup>わす</sup>を<sup>わす</sup>忘<sup>わす</sup>れ<sup>わす</sup>  
<sup>おし</sup>る<sup>いま</sup>と<sup>いま</sup>教<sup>いま</sup>えた<sup>いま</sup>もの<sup>いま</sup>だ。<sup>いま</sup>今<sup>いま</sup>の<sup>いま</sup>人<sup>いま</sup>は<sup>いま</sup>己<sup>いま</sup>れ<sup>いま</sup>を<sup>いま</sup>忘<sup>いま</sup>れる<sup>いま</sup>な<sup>いま</sup>と<sup>いま</sup>教<sup>いま</sup>える<sup>いま</sup>か<sup>いま</sup>ら<sup>いま</sup>ま<sup>いま</sup>る<sup>いま</sup>で<sup>いま</sup>違<sup>いま</sup>う。<sup>いま</sup>二<sup>いま</sup>六<sup>いま</sup>時<sup>いま</sup>中<sup>いま</sup>己<sup>いま</sup>れ<sup>いま</sup>と<sup>いま</sup>云<sup>いま</sup>  
<sup>いしき</sup>意<sup>じゅうまん</sup>識<sup>たいへい</sup>を<sup>とき</sup>も<sup>とき</sup>つ<sup>とき</sup>て<sup>とき</sup>充<sup>しよねつじごく</sup>満<sup>しよねつじごく</sup>して<sup>しよねつじごく</sup>い<sup>しよねつじごく</sup>る。<sup>しよねつじごく</sup>そ<sup>しよねつじごく</sup>れ<sup>しよねつじごく</sup>だ<sup>しよねつじごく</sup>か<sup>しよねつじごく</sup>ら<sup>しよねつじごく</sup>二<sup>しよねつじごく</sup>六<sup>しよねつじごく</sup>時<sup>しよねつじごく</sup>中<sup>しよねつじごく</sup>太<sup>しよねつじごく</sup>平<sup>しよねつじごく</sup>の<sup>しよねつじごく</sup>時<sup>しよねつじごく</sup>は<sup>しよねつじごく</sup>な<sup>しよねつじごく</sup>い<sup>しよねつじごく</sup>。<sup>しよねつじごく</sup>い<sup>しよねつじごく</sup>つ<sup>しよねつじごく</sup>で<sup>しよねつじごく</sup>も<sup>しよねつじごく</sup>焦<sup>しよねつじごく</sup>熱<sup>しよねつじごく</sup>地<sup>しよねつじごく</sup>獄<sup>しよねつじごく</sup>だ。  
<sup>てんか</sup>天<sup>なに</sup>下<sup>くすり</sup>に<sup>こと</sup>何<sup>さんこうげつかむがに</sup>が<sup>しきよう</sup>薬<sup>しきよう</sup>だ<sup>しきよう</sup>と<sup>しきよう</sup>云<sup>しきよう</sup>つ<sup>しきよう</sup>て<sup>しきよう</sup>己<sup>しきよう</sup>れ<sup>しきよう</sup>を<sup>しきよう</sup>忘<sup>しきよう</sup>れる<sup>しきよう</sup>よ<sup>しきよう</sup>り<sup>しきよう</sup>薬<sup>しきよう</sup>な<sup>しきよう</sup>事<sup>しきよう</sup>は<sup>しきよう</sup>な<sup>しきよう</sup>い<sup>しきよう</sup>。<sup>しきよう</sup>三<sup>しきよう</sup>更<sup>しきよう</sup>月<sup>しきよう</sup>下<sup>しきよう</sup>入<sup>しきよう</sup>無<sup>しきよう</sup>我<sup>しきよう</sup>と<sup>しきよう</sup>は<sup>しきよう</sup>こ<sup>しきよう</sup>の<sup>しきよう</sup>至<sup>しきよう</sup>境<sup>しきよう</sup>を<sup>しきよう</sup>  
<sup>えい</sup>咏<sup>しんせつ</sup>じた<sup>しぜん</sup>もの<sup>イギリス</sup>さ。<sup>じまん</sup>今<sup>こうい</sup>の<sup>こうい</sup>人<sup>こうい</sup>は<sup>こうい</sup>親<sup>こうい</sup>切<sup>こうい</sup>を<sup>こうい</sup>し<sup>こうい</sup>て<sup>こうい</sup>も<sup>こうい</sup>自<sup>こうい</sup>然<sup>こうい</sup>を<sup>こうい</sup>か<sup>こうい</sup>い<sup>こうい</sup>て<sup>こうい</sup>い<sup>こうい</sup>る。<sup>こうい</sup>英<sup>こうい</sup>吉<sup>こうい</sup>利<sup>こうい</sup>の<sup>こうい</sup>ナ<sup>こうい</sup>イ<sup>こうい</sup>ス<sup>こうい</sup>な<sup>こうい</sup>ど<sup>こうい</sup>と<sup>こうい</sup>自<sup>こうい</sup>慢<sup>こうい</sup>す<sup>こうい</sup>る<sup>こうい</sup>行<sup>こうい</sup>為<sup>こうい</sup>  
<sup>ぞんがいじかくしん</sup>も<sup>は</sup>存<sup>えいこく</sup>外<sup>てんし</sup>自<sup>インド</sup>覚<sup>あそ</sup>心<sup>い</sup>が<sup>い</sup>張<sup>い</sup>り<sup>い</sup>切<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>そ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>に<sup>い</sup>な<sup>い</sup>っ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>い<sup>い</sup>る。<sup>い</sup>英<sup>い</sup>国<sup>い</sup>の<sup>い</sup>天<sup>い</sup>子<sup>い</sup>が<sup>い</sup>印<sup>い</sup>度<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>遊<sup>い</sup>び<sup>い</sup>に<sup>い</sup>行<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>、<sup>い</sup>印<sup>い</sup>度<sup>い</sup>の<sup>い</sup>王<sup>い</sup>族<sup>い</sup>  
<sup>しよくたく</sup>と<sup>とも</sup>食<sup>まえ</sup>卓<sup>まへ</sup>を<sup>まへ</sup>共<sup>まへ</sup>に<sup>まへ</sup>し<sup>まへ</sup>た<sup>まへ</sup>時<sup>まへ</sup>に<sup>まへ</sup>、<sup>まへ</sup>そ<sup>まへ</sup>の<sup>まへ</sup>王<sup>まへ</sup>族<sup>まへ</sup>が<sup>まへ</sup>天<sup>まへ</sup>子<sup>まへ</sup>の<sup>まへ</sup>前<sup>まへ</sup>と<sup>まへ</sup>も<sup>まへ</sup>心<sup>まへ</sup>づ<sup>まへ</sup>か<sup>まへ</sup>ず<sup>まへ</sup>に<sup>まへ</sup>、<sup>まへ</sup>つ<sup>まへ</sup>い<sup>まへ</sup>自<sup>まへ</sup>国<sup>まへ</sup>の<sup>まへ</sup>我<sup>まへ</sup>流<sup>まへ</sup>を<sup>まへ</sup>出<sup>まへ</sup>し<sup>まへ</sup>て<sup>まへ</sup>  
<sup>じゃがいも</sup>馬<sup>てづか</sup>鈴<sup>さら</sup>薯<sup>さら</sup>を<sup>まっか</sup>手<sup>まっか</sup>攫<sup>まっか</sup>み<sup>まっか</sup>で<sup>まっか</sup>皿<sup>まっか</sup>へ<sup>まっか</sup>と<sup>まっか</sup>つ<sup>まっか</sup>て<sup>まっか</sup>、<sup>まっか</sup>あ<sup>まっか</sup>と<sup>まっか</sup>か<sup>まっか</sup>ら<sup>まっか</sup>真<sup>まっか</sup>赤<sup>まっか</sup>に<sup>まっか</sup>な<sup>まっか</sup>っ<sup>まっか</sup>て<sup>まっか</sup>愧<sup>まっか</sup>じ<sup>まっか</sup>入<sup>まっか</sup>つ<sup>まっか</sup>たら<sup>まっか</sup>、<sup>まっか</sup>天<sup>まっか</sup>子<sup>まっか</sup>は<sup>まっか</sup>知<sup>まっか</sup>ら<sup>まっか</sup>ん<sup>まっか</sup>顔<sup>まっか</sup>を<sup>まっか</sup>し<sup>まっか</sup>て<sup>まっか</sup>や<sup>まっか</sup>  
<sup>にほんゆび</sup>は<sup>にほんゆび</sup>り<sup>にほんゆび</sup>二<sup>にほんゆび</sup>本<sup>にほんゆび</sup>指<sup>にほんゆび</sup>で<sup>にほんゆび</sup>馬<sup>にほんゆび</sup>鈴<sup>にほんゆび</sup>薯<sup>にほんゆび</sup>を<sup>にほんゆび</sup>皿<sup>にほんゆび</sup>へ<sup>にほんゆび</sup>と<sup>にほんゆび</sup>つ<sup>にほんゆび</sup>た<sup>にほんゆび</sup>そ<sup>にほんゆび</sup>う<sup>にほんゆび</sup>だ<sup>にほんゆび</sup>.....」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問であった。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が後をつける。「やはり英国のある兵營で聯隊の士官が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が済んで手を洗う水を硝子鉢へ入れて出したら、この下士官は宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐうと飲んでしまった。すると聯隊長が突然下士官の健康を祝すと云いながら、やはりフヒンガー・ボールの水を一息に飲み干したそうだ。そこで並みいる士官も我劣らじと水盃を挙げて下士官の健康を祝したと云うぜ」

「こんな噺もあるよ」とだまってる事の嫌な迷亭君が云った。「カーライルが始めて女皇に謁した時、宮廷の礼に嫺わぬ変物の事だから、先生突然どうですと云いながら、どさりと椅子へ腰をおろした。ところが女皇の後ろに立っていた大勢の侍従や官女がみんなくすくす笑い出した——出したのではない、出そうとしたのさ、すると女皇が後ろを向いて、ちょっと何か相図をしたら、多勢の侍従官女がいつの間にかみんな椅子へ腰をかけて、カーライルは面目を失わなかったと云うんだが随分御念の入った親切もあったもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立ってても平気だったかも知れませんよ」と寒月君が短評を試みた。

「親切の方の自覚心はまあいいがね」と独仙君は進行する。「自覚心があるだけ親切をするにも骨が折れる訳になる。気の毒な事さ。文明が進むに従って殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになるなどと普通云うが大間違いさ。こんなに自覚心が強くなって、どうしておだやかになれるものか。なるほどちょっと見るとごくしずかで無事なようだが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちょうど相撲が土俵の真中で四つに組んで動かないようなものだろう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を打っているじゃないか」

「喧嘩も昔しの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえって罪はなかったが、近頃じゃなかなか巧妙になってるからなおなお自覚心が増してくるんだね」と番が迷亭先生の頭の上に廻って来る。「ベーコンの言葉に自然の力に従って始めて自然に勝つとあるが、今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出来上ってるから不思議だ。ちょうど柔術のようなものさ。敵の力を利用して敵を斃す事を考える……」

「または水<sup>すいりょく</sup>力<sup>でんき</sup>電気のようなものですね。水<sup>みず</sup>の力<sup>さか</sup>に逆<sup>でんりょく</sup>らわないでかえってこれを電<sup>へんか</sup>力<sup>りょく</sup>に変<sup>へんか</sup>化<sup>りょく</sup>して立<sup>りっぱ</sup>派<sup>やく</sup>に役<sup>た</sup>に立<sup>た</sup>たせる……」と寒<sup>い</sup>月<sup>い</sup>君<sup>い</sup>が言<sup>い</sup>いかけると、独<sup>ひ</sup>仙<sup>と</sup>君<sup>と</sup>がすぐそのあ<sup>ひ</sup>とを引<sup>と</sup>き取<sup>と</sup>った。「だから貧<sup>ひんじ</sup>時<sup>ひん</sup>には貧<sup>ばく</sup>に縛<sup>ふじ</sup>せられ、富<sup>ふ</sup>時<sup>ふ</sup>には富<sup>ふ</sup>に縛<sup>ふ</sup>せられ、憂<sup>ゆうじ</sup>時<sup>ゆう</sup>には憂<sup>ゆう</sup>に縛<sup>ゆう</sup>せられ、喜<sup>き</sup>時<sup>き</sup>には喜<sup>き</sup>に縛<sup>き</sup>せられるのさ。才<sup>ち</sup>人<sup>しや</sup>は才<sup>ち</sup>に斃<sup>やぶ</sup>れ、智<sup>く</sup>者<sup>しゃ</sup>は智<sup>み</sup>に敗<sup>か</sup>れ、苦<sup>かん</sup>沙<sup>ん</sup>弥<sup>しゃく</sup>君<sup>も</sup>のような癩<sup>か</sup>癩<sup>か</sup>持<sup>か</sup>ちは癩<sup>か</sup>癩<sup>か</sup>を利用<sup>か</sup>さえすればす<sup>か</sup>ぐに飛<sup>か</sup>び出<sup>か</sup>して敵<sup>か</sup>の<sup>か</sup>てん<sup>か</sup>に<sup>か</sup>罹<sup>か</sup>る……」

「ひやひや」と迷<sup>て</sup>亭<sup>て</sup>君<sup>て</sup>が手<sup>て</sup>をたたくと、苦<sup>わ</sup>沙<sup>ら</sup>弥<sup>わ</sup>君<sup>わ</sup>はにやにや笑<sup>わ</sup>いながら「これでなかなかそう甘<sup>う</sup>くは行<sup>ま</sup>かないのだよ」と答<sup>こ</sup>えたら、み<sup>い</sup>ん<sup>ち</sup>な<sup>ど</sup>一<sup>だ</sup>度<sup>だ</sup>に笑<sup>だ</sup>い出<sup>だ</sup>した。

「時<sup>とき</sup>に金<sup>かね</sup>田<sup>だ</sup>のよ<sup>なん</sup>う<sup>た</sup>な<sup>お</sup>のは何<sup>なん</sup>で斃<sup>た</sup>れるだ<sup>ら</sup>う」

「女<sup>に</sup>房<sup>うぼう</sup>は鼻<sup>はな</sup>で斃<sup>し</sup>れ、主<sup>しゅ</sup>人<sup>じん</sup>は因<sup>いん</sup>業<sup>ごう</sup>で斃<sup>こ</sup>れ、子<sup>こ</sup>分<sup>ぶん</sup>は探<sup>たん</sup>偵<sup>てい</sup>で斃<sup>た</sup>れか」

「娘<sup>むすめ</sup>は？」

「娘<sup>み</sup>は——娘<sup>こと</sup>は見<sup>み</sup>た事<sup>こと</sup>がないから何<sup>い</sup>とも云<sup>い</sup>えないが——ま<sup>き</sup>ず<sup>だ</sup>着<sup>だ</sup>倒<sup>だ</sup>れか、食<sup>く</sup>い<sup>だ</sup>倒<sup>だ</sup>れ、も<sup>の</sup>し<sup>の</sup>く<sup>の</sup>は吞<sup>の</sup>ん<sup>の</sup>だ<sup>の</sup>くれの<sup>た</sup>類<sup>ぐい</sup>だ<sup>ら</sup>う。よ<sup>こ</sup>も<sup>だ</sup>や<sup>だ</sup>恋<sup>こ</sup>い<sup>だ</sup>倒<sup>だ</sup>れにはな<sup>る</sup>まい。こ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>によ<sup>と</sup>ると卒<sup>そ</sup>塔<sup>と</sup>婆<sup>ぼ</sup>小<sup>こ</sup>町<sup>まち</sup>のよ<sup>ゆ</sup>う<sup>ゆ</sup>に行<sup>ゆ</sup>き<sup>ゆ</sup>倒<sup>だ</sup>れ<sup>し</sup>になる<sup>し</sup>か<sup>も</sup>知<sup>し</sup>れ<sup>な</sup>い」

「それ<sup>すこ</sup>は少<sup>すこ</sup>し<sup>し</sup>ひ<sup>ひ</sup>ど<sup>ど</sup>い」と新<sup>しん</sup>体<sup>たい</sup>詩<sup>し</sup>を<sup>さ</sup>き<sup>さ</sup>き<sup>き</sup>捧<sup>た</sup>げ<sup>た</sup>だ<sup>け</sup>に東<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup>君<sup>くん</sup>が異<sup>い</sup>議<sup>ぎ</sup>を<sup>もう</sup>申<sup>た</sup>し<sup>た</sup>て<sup>た</sup>。

「だから<sup>おう</sup>無<sup>む</sup>所<sup>じょ</sup>住<sup>じゅう</sup>而<sup>に</sup>生<sup>しょう</sup>其<sup>ご</sup>心<sup>しん</sup>と云<sup>だ</sup>う<sup>い</sup>のは大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>な言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>だ、そ<sup>き</sup>う<sup>き</sup>云<sup>い</sup>う<sup>い</sup>境<sup>きょう</sup>界<sup>がい</sup>に<sup>いた</sup>至<sup>いた</sup>ら<sup>ん</sup>と人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>は苦<sup>くる</sup>しく<sup>く</sup>て<sup>く</sup>な<sup>ら</sup>ん」と独<sup>どく</sup>仙<sup>せん</sup>君<sup>くん</sup>し<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>り<sup>き</sup>に<sup>さ</sup>ど<sup>ど</sup>り<sup>ど</sup>り<sup>ど</sup>悟<sup>さと</sup>ったよ<sup>う</sup>な事<sup>じ</sup>を<sup>う</sup>云<sup>う</sup>。

「そ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>威<sup>い</sup>張<sup>ば</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>ん<sup>ん</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>よ。君<sup>きみ</sup>な<sup>な</sup>ど<sup>ど</sup>は<sup>でん</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>こ</sup>によ<sup>う</sup>ると電<sup>でん</sup>光<sup>こう</sup>影<sup>えい</sup>裏<sup>り</sup>に<sup>だ</sup>さ<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>倒<sup>だ</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>る<sup>る</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>知<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>ぜ」

「と<sup>い</sup>か<sup>い</sup>く<sup>く</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>い</sup>勢<sup>せい</sup>で<sup>ぶ</sup>ん<sup>ぶ</sup>め<sup>め</sup>い<sup>い</sup>すす<sup>す</sup>で<sup>い</sup>行<sup>ひ</sup>った<sup>ぼ</sup>日<sup>い</sup>に<sup>い</sup>や<sup>い</sup>僕<sup>ぼく</sup>は<sup>い</sup>生<sup>い</sup>きて<sup>い</sup>る<sup>い</sup>の<sup>い</sup>は<sup>い</sup>い<sup>い</sup>や<sup>い</sup>だ」と主<sup>しゅ</sup>人<sup>じん</sup>が<sup>だ</sup>い<sup>だ</sup>い<sup>だ</sup>出<sup>だ</sup>した。

「遠<sup>えん</sup>慮<sup>りょ</sup>は<sup>し</sup>い<sup>し</sup>ら<sup>し</sup>ない<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>死<sup>め</sup>ぬ<sup>い</sup>さ」と迷<sup>め</sup>亭<sup>てい</sup>が<sup>ごん</sup>言<sup>ごん</sup>下<sup>か</sup>に<sup>どう</sup>道<sup>どう</sup>破<sup>は</sup>する。

「死<sup>ごう</sup>ぬ<sup>じょう</sup>の<sup>は</sup>は<sup>は</sup>な<sup>は</sup>お<sup>は</sup>い<sup>は</sup>や<sup>は</sup>だ」と主<sup>しゅ</sup>人<sup>じん</sup>が<sup>は</sup>わ<sup>は</sup>か<sup>は</sup>ら<sup>は</sup>ん<sup>は</sup>強<sup>ごう</sup>情<sup>じょう</sup>を<sup>は</sup>張<sup>は</sup>る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見えま  
すね」と寒月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」と  
こんな時にすぐ返事の出来るのは迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であるごとく、死ぬ事を苦しむものは幸福さ」と  
独仙君は超然として出世間的である。

「君のように云うとつまり凶太いのが悟ったのだね」

「そうさ、禅語に鉄牛面の鉄牛心、牛鉄面の牛鉄心と云うのがある」

「そうして君はその標本と云う訳かね」

「そうでもない。しかし死ぬのを苦しむようになったのは神経衰弱と云う病気が発明さ  
れてから以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神経衰弱以前の民だよ」

迷亭と独仙が妙な掛合をのべつにやっていると、主人は寒月東風二君を相手にしてしきり  
に文明の不平を述べている。

「どうして借りた金を返さずに済みますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちゃなりませんよ」

「まあさ。議論だから、だまって聞くがいい。どうして借りた金を返さずに済みますかが問題で  
あるごとく、どうしたら死なずに済むかが問題である。いな問題であった。錬金術はこれで  
ある。すべての錬金術は失敗した。人間はどうしても死ななければならん事が分明になっ  
た」

「錬金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞いている。いいかい。どうしても死ななければならん事が  
分明ときになっただい時に第二の問題おこが起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これが第二の問題である。自殺じさつクラブはこの  
第二の問題と共ともに起るべき運命うんめいを有ゆうしている」

「なるほど」